

無気味なるものをめぐる思索のスタイル — O. F. ボルノウ『新しい庇護性』を読み直す —

井 谷 信 彦

0. 序 論

現代の教育思想を紐解いてみると、そこには或る一つの風潮を見て取ることができる。さまざまな立場からさまざまな論旨に基づいた議論がなされているが、その背景には一定の共通した認識が存しているように思われるのである。すなわち、現代社会が抱えている「教育問題」は従来までのそれとは質的に異なるものである、という認識。それゆえまた、その教育問題は従来の「近代科学的な」対処法においては解決することが困難である、という認識がそうである。問題となる教育事象を客観化して分析すること、その問題にあわせて対症療法的な解決策を与えること、そうした方法に一定の限界があるということは、なるほど疑いもない事実であるように思われる。したがって、そのような方途に代わって教育問題へと接近する新たな道行きが究明されなければならないという主張は、その意義を薄められることなく認められなければならないだろう。

しかしながら、ことはそれほど単純ではない。教育問題への関わり方に或る種の刷新をもたらすためには、そもそも「教育」や「問題」を「教育」や「問題」として理解し語る思考様式そのものが問い直されなければならないからである。そのような課題をめぐっては、近年の教育哲学や教育人間学などの領域において、幾つかの重要な研究がなされてきている。なかでも、臨床教育学という比較的新しい研究領域においては、教育をめぐる新たな思考様式の模索が中心的な課題として論じられている。これらの領域における諸研究は、それぞれ異なる見地から多様な議論を展開していながら、その根底においてはここに述べられたような教育学的な思惟の転換という共通の課題を担っている¹⁾。

そうした課題を受けて本稿では、20世紀ドイツの代表的な教育学者ボルノウ（O. F. Bollnow 1903～1991）による、「人間学的な考察法」についての議論を取りあげたい。何故いまさらボルノウなのか、と問われるかもしれない。確かに、人間学的な教育学をめぐるボルノウの思想については、すでに多くの充実した研究がなされている。もちろん、人間学的な考察法についての議論も、もっぱらその思想の特徴的な性格を表すものとして詳しく紹介されている。けれども、そうした従来の研究においては、教育事象へと関わる思考様式についてのボルノウの理論が、要約的に記述されるだけで終わっていることが少なくない。そのほとんどが、教育学における人間学的な考察法を主題的に扱ったボルノウの論考を参照し、その内容を概説することに留まっているのである。その考察法が実際の研究の過程でどのよ

うに活かされているのか、その結果として教育学研究に如何なる可能性が開かれることになるのか、十分な仕方ですることにまで論及した研究はこれまでほとんど行われていない。そしておそらくはそのことが、ボルノウの研究の成果を矮小化し覆い隠してしまっているようにさえ思われるのである。それゆえ本稿においては、ボルノウの人間学的な考察法について、かれ自身の思索の痕跡であるテキストを読み解くことを通してその在りようを問い直すべく試みることにしたい。これまで幾度となく解釈の網にさらされてきたボルノウのテキストを、その思想の内容ではなく考察と叙述のスタイルに焦点を当てて問い直すことで、それによって開き示される新たな思索の可能性を探求することが、本稿の中心的な課題である²⁾。

1. 人間学的な考察法の諸原理

人間学的な考察法についてのボルノウの論述の背景には、哲学的人間学の思想を生んだ20世紀初頭の思想史的な時代状況が存している。近代的な合理主義の権威が失われたこの時代にあっては、それまで自明なものとされていた幾つかの価値観が激しく動揺せしめられていた。人間の本質を規定するものとしての理性の地位は、生の哲学の登場以降、決定的な相対化を蒙ることとなった。正しい認識のための確固たる基盤を確保するという試みは不可能であることが明らかにされ、生命全体を視野に入れた包括的な人間理解が求められることになったのである。「人間であるとは、はたして如何なることなのか？」伝統的な哲学のうちで幾度も問い直されてきた問題が、ここに改めて立ち現れてくることになる。それまで当然のものと思われていたさまざまな規定と拠り所を失った人間は、再び圧倒的な謎に満ちた存在として人々の前に無気味な姿を現したのである³⁾。

それゆえ、人間学的な考察法についてのボルノウの議論を、人間というこのわけのわからないもの、容易には規定することのできないものをめぐる思索の方途についての論述として考えることができるだろう。云ってみればそれは、圧倒的な謎に満ちた無気味なるものをめぐる適切な理解と語りのスタイルについての考察である。本稿における議論の核心へと向かうに先立って、本章においては、従来の研究に即した仕方、人間学的な考察法についてのボルノウの論述を検証しておきたい。教育学における人間学的な考察法について論じるにあたってボルノウは、その考察法に特徴的な原理をさしあたり次の三つに要約して見せている。すなわち、1. 人間学的な還元の原理、2. オルガノンの原理、3. 個々の現象の人間学的な解釈の原理、がそれである⁴⁾。以下では、これら三つの諸原理について、ボルノウの考察に従ってその内実を究明することにしよう。

まず、第一に挙げられた「人間学的な還元の原理」とは如何なるものか。プレスナーに依拠しながらボルノウは、人間を「文化の生まれる創造的な〈場所〉」として把握する。人間の創造的な営みによって生みだされたものである文化は、「それらが人間生活のなかで果たすべき役割から」理解されねばならない、というのである。したがって、ここでいう「還元」とは、より高次のものから低次のものへの単純化などではない。そうではなく、さまざまな文化的な現象を「その根源である人間にまで遡って」理解しようとするところこそが、人間学

的な還元における根本契機にほかならない⁵⁾。

このように諸文化をその根源である人間の方から把握しようとする人間学的な還元に対して、第二のオルガノンの原理においては、まったく逆の手続きがとられることになる。人間が生みだした文化的な諸現象へと着目することで、その根源である人間の本質を明らかにしようというわけである。ボルノウによればこれは、「人間は内省によってではなく、自分を客観化する回り道によってのみ、自分自身を知ることができる」というディルタイの主張を、包括的な人間学の原理にまで高めたものである、と云うことができる⁶⁾。

このように対称的な二つの原理に対して、三つ目の原理は、これら最初の二つの原理をより一般的な現象にまで敷衍したものであると見ることができる。人間の生のうちには、気分、感情、衝動など、文化的な現象からは直接に把握しがたい多くの現象が生起している、とボルノウは云う。それゆえ、まず「任意の人間生活の現象から出発して、そこから全体的な人間の理解を」得るための方途が求められることになる。ボルノウの言葉を借りれば、それは「生命の現実のなかに与えられたこの特殊な現象が、人間の本質全体のなかで意味深い必然的な一部として理解できるためには、人間の本質全体はどのように作られていなければならないのか？」を問うことにほかならない。このように問いかけることこそ、個々の現象の人間学的な解釈の核心を占める契機である⁷⁾。

先にも述べたように、この最後に挙げられた原理は、他の二つの原理をあわせて一般化したものである。それゆえ、この個々の現象の人間学的な解釈の原理こそが、教育学における人間学的な考察法の特徴的な性格を示すものであると云うことができる。ところで、この原理についてボルノウは、1941年刊行の著作『気分の本質』においてすでに言及している。それによれば、この人間学的な解釈の原理は、必然的にいま一つの重要な原理へと結びついているものである。プレスナーに依拠してボルノウは、それを「開かれた問いの原理」と呼ぶ。その名の通り、端的に云ってこの原理は、人間存在の本質を究め尽くすことの不可能性を表現したものである。個々の現象の解釈をその方法原理とするかぎりにおいて、人間学的な考察はいつも新たな生の現象へと開かれていなければならない。新たな現象についての考察において、これまでの独断的な確定が転覆されることもあるだろう。人間学的な考察は、いつも人間存在の謎に満ちた無気味さへと開かれていなくてはならないのである。人間存在の本質について、それを常に吟味し新たに問い直そうとする姿勢こそ、人間学的な考察における研究者の根本的な態度にほかならない⁸⁾。

この開かれた問いの原理から導かれる人間学的な考察の特徴について、G. ブロイアーはそれを五つの論点において要約的に明らかにしている。それによれば、1. 人間学的な研究は、あらかじめ構築された全体的な人間像から着手されうるものではない。人間の本質的な特徴についての了解と個々の現象の解釈とは、「相互に循環的に依存しあっている」ものである。2. それゆえ哲学的人間学は、そもそも明確な始まりや終わりをもたない。とはいえそれは、解答を与えることのできない問題について、「遺憾ながら問われたままにしておかなくてはならない」ということではもちろんない。人間学的な探求は、「示唆的であるとい

う意味において、また同様にその原理からして、方法的－発見的な意味において」開かれたものである。3. したがって人間学は、「予測のつかない新しい可能性の豊かさへと向かって開き保たれて」いるのでなければならない。たとえその新しい可能性が、それまでの理解に改変を迫るものであったとしてもである。4. 可能性へと開かれているというこの性格のゆえに、開かれた問いの原理は「批判的な機能」を備えている。すなわちそれは、「独断的な規定を撤回することを強制し、反論を遠ざけておこうとする閉鎖的な人間観を問いに付す」ものであるということが出来る。5. 最後に、この開かれた問いの原理はそれ以外の方法的な諸原理との連関において見られなければならない⁹⁾。

ブロイアーによるこれらの諸命題は、循環的 (zirkular)、発見的 (heuristisch)、可能的 (möglich)、批判的 (kritisch)、という四つの人間学的な研究に特徴的な性格を明らかにしている。これらの方法的な諸性格は、ボルノウの思想をその根底において支えている二重の緊張関係 (すなわち、解釈学/現象学、生の哲学/実存哲学) のうちから必然的に生じてきたものであると考えることができる。ボルノウにおける人間学的な考察法についての従来の研究も、重点の置き方によって違いはあるにせよ、多くはこれら四つの諸性格をめぐるなされている。もちろん、本稿における議論もそれらの諸成果に反対するものではない。むしろ、すでに幾度となく言及されてきたこれらの方法的な諸性格が、ボルノウの実際のテキストにおいてどのような仕方で現れており、またどのような機能をもつものであるのかを明らかにすることが本稿の目的である。そのような考察から、ボルノウによる人間学的な考察法が教育学研究にとって如何なる可能性を開くものであるのかについても、幾つかの重要な示唆がもたらされることが期待される。

以上において本章では、人間学的な考察法についてのボルノウの論述を検証し、そこから導かれうる方法的な特徴を明らかにすることができた。ボルノウによる人間学的な考察法の核心を占めるのは、「個々の現象の人間学的な解釈の原理」と「開かれた問いの原理」という二つの契機である。これらのうち、特に前者は人間学的な考察の方法原理として、後者は研究者の根本態度を示すものとして、理解することができるだろう。次章においては、これら二つの原理を念頭におきながら、ボルノウの実際のテキストを読み解くことが試みられることになる。もちろんそのさいにも、考察の重心はテキストの主張する内容ではなく、その内容が主張されるときに叙述のスタイルから生じる効果のほうに置かれている。内容と形式、両者が分かち難く結びついたものであることは云うまでもない。したがって、従来の研究が特にボルノウの思想の内容を中心的に扱ったものであったとすれば、その形式に焦点を当てようとする本稿の試みは、これまでの研究と相互に補完しあうものとして位置づけられることになるだろう。

2. 実存主義克服の「問題」

前章においてさしあたり明らかにされた人間学的な考察法の原理は、ボルノウの実際の思索においてどのように活かされているのだろうか。そのことを究明するべく、以下ではボル

ノウの代表的な著作の一つである『新しい庇護性』¹⁰⁾を取りあげたい。実存哲学における人間観から「希望の哲学」への転向を試みた本書は、ボルノウの思索に特徴的な緊張感に満ちたスタイルを究明するために、最も適したものであると考えられるからである。『新しい庇護性』におけるボルノウの思索に向きあうことを通じて、人間学的な考察法をその動的な性格において明らかにすることが当面の課題である。とはいえ紙幅の都合上、本書における膨大な記述のすべてをつぶさに見てゆくわけにはいかない。それゆえ本稿では特に、人間学的な考察法の特徴を端的に示していると思われる序論部分を中心的に読み解いてゆくことにしよう。序論において示唆された考察と叙述のスタイルに着目することで、本書全体が従来とは異なった景観を現すことになるだろう。

1955年に上梓された著書『新しい庇護性』には、「実存主義克服の問題」という副題が付けられている¹¹⁾。この副題からして本書に実存主義の思想からの鮮やかな跳躍を期待するものは、序論の冒頭においてすぐさま予期せぬ動揺を味わうことになる。

この研究のテーマは、極めて注意深く選ばれている。すなわち、実存主義克服の問題として、問題という言葉に特に強調点がおかれている。これによって表現されているのは、ここでは実存主義の克服そのものに関わるべきなのではない、ということである¹²⁾。

ボルノウによれば、実存主義とはたんなる哲学的に占有された事柄ではなく、「包括的な精神史的発展の必然的な表現として」生じてきたものである。それゆえ、その克服もまた「個人の能力を遥かに越える」ことであり、「我々の時代の全体的な精神生活の運動からのみもたらされる」ものである。ましてや、ボルノウ独りの思索において、実存主義の思想そのものが乗り越えられるわけではない。もしそのようなことが可能であると考えたら、それは「思いあがり」として非難されることになるだろう。「包括的な」とか「全体的な」といった言葉は、個々の人間による営為を越えた、より大きな力を予感させる。読者はいつのまにか、個人の意志によってはまならない「包括的な精神史的発展」のうちへと飲み込まれている自分を見出すことになるのである。それは、わたし独りの力では如何ともしがたいものである。しかし、間違いなくわたしは、その全体へと差し向けられている。個別のなものと全体的なものとのあいだの往還が、巨大な渦を巻き起こす。それはいわば「問い」(die Frage)の渦である。実存主義の思想とその克服という主題が、読者を巻き込んで動き始める。始めにみずから厭わずその渦のなかに跳びこんでみせるのは、著者であるボルノウ自身にはかならない。そのとき実存主義の克服は、著者の独力によっては達成不可能な困難として読者の前に浮かび上がってくることになる。「問題」(das Problem)は誰かに委ねられている。著者の手を離れたそれは、読者ですら手の届かない渦の中心へと投げだされる。その宛先は、わたしではないが、わたしと無関係ではありえない。問いの渦はますます、その勢いをましてゆく。それは思いあがった人々の意思や努力を拒絶するものでありながら、御し難いその必然性によって否応なしに読者を惹きつける。渦を巻くその遠心力と求心力のはざ

まで、わたしは、ボルノウの演出する「問い」の舞台に為すすべもなく共演させられることになるのである。

当面の研究が立てた課題は遥かに謙虚なものである。それが関わるべき事柄は、そうした克服の問題をできるかぎり明確に際立たせ、そのさいに満たされねばならない条件に見通しをつけ、そこにおいて人が取らねばならない方向を指し示すことだけである¹³⁾。

「問題」という言葉が予期させる極めて広大な全体に対して、「課題」(die Aufgabe)という言葉によって示されるのは「遥かに謙虚な」事柄である。それはあたかも、わたしを巻き込んだ渦の中心へと至るための道を示す、ひとすじの光のようにさえ思われる。課題はさしあたり、ボルノウ自身の手によって、はっきりとした輪郭によって縁取られた直線的な道程として描きだされているかのように見える。しかしながら、そこにはまるで抜けない棘のように「ねばならない」(müssen)という言葉が挟み込まれていることを、見逃してはならない。みずから問いの渦のなかへと跳びこんだ著者にとって、課題を選択し定立するだけの自由はもはや残されていない。課題を立てたのは、研究それ自体である。それが関わるべき事柄を恣意に任せることは、著者であるボルノウ自身にも読者であるわたしにも許されていない。課題は研究の主題である「実存主義克服の問題」のほうから、その主役である「全体的な精神生活の運動」によって、もたらされてくるのでなければならない。それゆえ、この課題は幾重にも「謙虚な」ものである。課題の定立において、著者と読者の双方における主体性の剥奪が密かに完了している。当面の研究は、それ自体のために、課題をすでに立ててしまっている (sich die Aufgabe gestellt haben)。問いの渦のなかへと為すすべもなく巻き込まれたわたし自身にとって、それはまさに「課せられたもの」にほかならないのである。

それ〔その課題〕について〔über:それを越えて〕人はさらに、そのように問題意識に目覚めていることによって同時に、このような克服を支持するべく現在すでに存在している幾つかの兆しへといっそう開かれることを期待することもできるだろう¹⁴⁾。

個別的なものとしてのわたしと、全体性に委ね渡されたものとしてのわたしとが、生まれては消える波頭のように、交互に立ち現れてくる。渦が速度を増すほど、中心はますます深く、くっきりとその輪郭を現してくるだろう。そうすることによってのみわたしは、もたらされた課題を越えてゆくことができる。越えてゆくといっても、それはもちろん、問題に見切りをつけて問いの渦の外へと出てしまうことではない。わたしが思索することを止めた途端に、渦は消え去り、中心はその輪郭を失うことになる。とはいえ、課題を越えていくことによってわたしは、跳躍して渦の中心へと辿り着くことができるというのでもない。中心の深淵に辿り着いたものを待ち受けているのは、思考停止という死の快楽にほかならない。いずれにせよ、後にはただ何事もなかったかのごとく、穏やかな海が広がるだけだろう。わた

しに出来ることは、ただ回り始めた渦の運動を止めないように、その深淵の縁に踏みとどまることだけである。そうすることによってのみ、問いの渦の中心、すなわち実存主義の克服という問題は、まるで一つの予徴のように、わたしの眼下に開き示されることになるだろう。渦の中心には、もともと何か或るものが存在していたわけではない。それをめぐるって営まれる個別的なものと全体的なものとのあいだの往還において初めて、中心はその輪郭を留めうるにすぎない。もともと「何事もなかった」はずの場所に「何か或るもの」を見出すこと、それは問いの最中であって啓示をもたらす兆しや予徴において初めて可能となる。それゆえボルノウが云うように、「ただ求められるがままに心を決めてそれらの兆しを捉えることだけが」重要なのである。

以上において本稿は、さしあたり『新しい庇護性』の序論の第一節を、ボルノウの語りをもつ動的な性格に着目しながら検証した。実存主義の克服という「問題」をめぐるボルノウの語りは、読者をも巻き込んで巨大な渦を形成する。それは、個別的なものと全体的なものとのあいだの往還によって生まれる問いの渦である。「実存主義克服の問題」という中心を浮かびあがらせ、その中心をめぐるなされるこの思索のスタイルの特徴を、ここでは特に、語りの「渦動性」と呼ぶことにしたい。全体的・包括的なものと個別的・部分的なものとのあいだの循環は、解釈学的な省察の「対象」においてのみ現れてくるのではない。人間学的な考察においては、その考察に携わるもの自身が、個別的なものとしての自己と包括的な生の全体性へと委ねられたものとしての自己という二重の存在様式のあいだにおいて、絶えまない問いの渦のなかへと投げだされているのである。このように著者と読者の双方を巻き込んで展開する問いの渦動性こそ、ボルノウの人間学的な研究における思索のスタイルを特徴付ける第一の契機にほかならない。

「問題」をめぐる渦へと飲み込まれたものは、その中心へと向かう道をみずからの恣意において選択することはもはやできない。課題は問題そのもののほうから、問題そのものを通してもたらされるのでなければならないのである。問いの渦のうちにおいて、わたしは、中心へと向かう求心力とそこからの遠心力とのせめぎあいのただなかで、否応なしにその中心へと差し向けられている。人間学的な考察においては、著者と読者の双方における主体性の剥奪という契機が支配している。それは、個別的なものと全体的なものとのあいだで考察に携わるもの自身の特徴的な受動性を浮き彫りにするものである。事柄はいつも、それに即した仕方であらうことを要求している。それゆえ問題の核心へと迫ることは、或る事柄について進んで問うことであるというよりむしろ、その事柄によって促されるがままに問わざるをえないということにほかならない。このように思索するもの自身をその受動性へと投げ返す作用こそ、ボルノウの思索を特徴付ける第二の契機である。

渦動性、受動性に加わる第三の契機は、発見をもたらすものとしての兆しや予徴において特徴的な啓示性である。問いの渦の中心、すなわち実存主義克服の問題は、わたしが問うことより以前に存在するような実体的なものでは決してない。個別的なものと全体的なものとのあいだの往還において初めて、「問題」は「問題」としてその輪郭を浮かびあがらせるの

である。「問題」は、問うことを抜きにしては存在しえない。渦の中心を見定めるためには、あくまで問い続けることが要求されている。それゆえまたこの「問題」は、問うことを離れて実体的に概念把握された途端に運動を失って硬直し、もはやあらかじめ模範解答の用意された陳腐な難問に成りさがってしまうだろう。渦の中心へと辿り着くことが死に等しいというのは、そのためである。実存主義克服の「問題」は、ただその「問題」をめぐる問うことにおいてのみ、一つの兆しあるいは予徴として、その姿を現すことになる。問いの渦から抜け出したものは、結局それは何程のこともなかったのだ、というかもしれない。「問題」それ自体が実体をもたないものである以上、そうした見解は、確かに的を射ている。予感など、はかないものである。予徴など、些細なことである。けれども、速度を増す問いの渦の中心は、その深さゆえに、抗し難い力でもって読者を惹きつけて止まない。それは、その深さを計り知ることすらできない、底知れぬ深淵である。それゆえにこそ「問題」は、絶えまなくさらなる深みへとわたしを誘うのである。この尽きせぬ深みあるいは奥行きこそが、「問題」を「問題」として発見することを促す兆しや予徴の啓示的な性格を端的に示唆するものにほかならない。問いの渦の中心は、その絶えまない深化の運動において、兆しや予徴という仕方での輪郭を縁取られるものである。

実際私は、そのような克服へと向かう確かな最初の兆候がすでに現れてきている (abzuzeichnen beginnen: 輪郭をもち始めている) ことや、幾つかの兆しがさまざまな方面からこの共通の目標に向かって顕著に集中していること、そしてただ求められるままに心を決めてそれらを捉えることだけが重要なのだということを、確信している¹⁵⁾。

ここにおいて初めて、私 (ich) という著者ボルノウ自身を示す主語が現れてきているのが印象的である。読者を実存主義克服の問題へと差し向けるはずのさまざまな兆しや予徴、それらはしかし、ボルノウ自身の「確信」においてすでにそれとして理解されているにすぎないものである。問いの渦の中心は、その渦に巻き込まれたものが、そのつどそれ自身において新たに発見するほかはない。そこにある種の兆しや予徴を見出すことは、いまや読者一人ひとりに委ねられているのである。もちろんこうした要求はいつもすでに、個別的なものとしてのわたしを越えて、全体性へと委ねられたものとしてのわたしへと宛てられたものであることを忘れてはならない。絶えず渦の中心からもたらされる衝撃は、間違いなくわたしへと向けて繰りだされたものでありながら、そのつどわたしを越えて大きな波紋を呼び起こしてゆくものである。問いの渦はいまや、著者自身にもままたらぬ勢いで読者をも巻き込みながら、なおその速度を増しつつある。

3. 「問題」をめぐる思索の諸特徴

前章において本稿は、ボルノウの人間学的な考察に特徴的な性格を、読者をも巻き込む渦動性、受動性、啓示性という三つの契機において、さしあたり先取的に明らかにした。とは

いえ、ここまでに触れることができたのは『新しい庇護性』の序論の冒頭部分を占める一節にすぎない。それゆえ、以下では特にこれら三つの契機を導きの糸として、序論の残りの部分を読み解いてゆくことにしたい。

A. 受動性——冷静と情熱のはざま

それとは反対に、もし今日まだ実存主義の問題性の十分な解明とそれに基づく克服へと辿り着かないならば、私たちは、誤った安全性に身を委ねることになるだろう。そして未解決の問いは、後になるほどいっそう激しく私たちを襲うことだろう。

実存主義克服の問題をめぐる問いは、いまや「私たち」(wir)をその担い手として語り表されることになる。著者ボルノウを指し示す「私」という表現は、一度姿を見せたきり、もはや現れてくる気配もない。一度だけ顔を覗かせたというそのことが、かえって著者からの問題の委ね渡しを宣言しているかのようである。「私たち」は、個別的なものとしてのわたしを名指しにはしないが、わたしと無関係ではありえない、全体的なものの代名詞である。実存主義の克服をめぐる問いの渦は、わたしをも巻き込みながら、わたしにはままたらない勢いでもって回り続けている。第二節以降、至る所に現れてくる「ねばならない」(müssen)という表現が、荒れ狂う波の激しさを暗示している。

それとは反対に、人は実存主義を乗り越えるべく全力で取り組まねばならない¹⁶⁾。

問いの渦に巻き込まれたものの徹底した受動性は、冷静な論理に基づいた合理的な思考における特徴的な限界を示唆している。如何なる問題においても、渦の中心をめぐる問うものを支配するのは、ボルノウが「心情の欲求」(Gemütsbedürfnis)と呼ぶものである。問いの渦が象った深淵の縁において、苦痛と快楽が交互に打ち寄せる。

……しかし他面において人は、まったくそれゆえに、それについて〔über：それを越えて〕一般に哲学的に責任ある証言がなされうる事柄の周縁で動いているのであって、心情の欲求が冷静な探求の歩調を乱すような危険に、たえずさらされている。けれどもこの心情の欲求は、対象そのものの本質によって主題と結びつけられているのだから、そこから完全に目を逸らしてしまえるような可能性はないのである¹⁷⁾。

徹底した受動性は、情熱的な欲求の裏返しである。激しさを増す渦の運動は、問うことを支配するパトスの(受苦的／情熱的)な契機へと、問うものを否応なしに直面させる。先にも述べたようにそれは、或る事柄について進んで問うことではなく、冷静と情熱のはざまにおいて、問わざるをえないということにほかならない。或る事柄をめぐる問わざるをえな

いというこの事態は、それについて客観的に考察することとは異なり、問うものそれ自身の在りよう (Ethos) へと心を配ることを余儀なくする。個別的なものと全体的なものとのあいだの往還において、問うことそれ自身における倫理 (Ethik) が問い質されているのである。実存主義の克服という問題の輪郭を縁取することは、ただ問うものそれ自身の在りようをそのつど問い直すことにおいてのみ、可能になるのだと云わねばならない。もちろん、それに気づいたからといって、すぐさま我が身を解き放ち自由に泳ぎ回ることができるわけではない。私たちはただ、ままたぬ身体を抱えながら、そのように「問わざるをえない」ことを真摯に受け止めることができるばかりである。

B. 渦動性 — 個別と全体のあいだで

実存主義克服の問題をめぐる問うことにおいて浮かび上がってくるのは、個別的なものとしてのわたしの在りようであり、わたしを越えた全体的なものとしての私たちの在りようである。渦の中心へと向けられていたはずの視線は、ここへきて俄かに、私たち自身の在りようへと向け返されることになる。いや、それはむしろ、私たち自身のうちにすでに問いの渦が胎動していたことに気づくことにほかならない。実存主義の特徴的な性格について論じた後に、ボルノウは、その思想の欠陥を次のように指摘している。

けれども、それによって同時に限界もまた与えられている。なぜなら、実存哲学は、こうした絶対的なものを、自己の魂の最奥の核心のうちにおいてのみ、つまり人間のもっとも絶望的な孤独化のうちにも、見つけ出したからである¹⁸⁾。

ボルノウによれば、実存哲学は「究極的な孤独と遺棄のうちへと人間を落とし入れる」ものである。したがって、その思想においては、「孤独の足枷」を断ち切る可能性もなければ、人間の外にある「支持的な関わり」、すなわちなんらかの「信頼しうる存在」へと辿り着く可能性もない。そして、まさにこのような側面において「実存主義克服の問題が避けがたいものとなるのだ」とボルノウは云う。なぜなら、このような孤独と遺棄のうちにおいては、「意味深い人間の生は絶対に不可能」だからである¹⁹⁾。

しかしそうすると、私たちの問題におけるもっとも差し迫った問いは、実存的な足枷を断ち切ることや、人間の外にある現実性への支持的な関わりを取り戻すことが、どのようにして人間にとって可能になるのか、ということである²⁰⁾。

「人間の外にある現実性」とは、他の人間や、共同社会、その制度、あるいは精神世界の力など、要するに「何か確固とした信頼できるものとして、人間の生に意味と内実を与えることのできる全てのもの」のことである。そして、この現実性との「支持的な関わり」を取り戻すことこそが「人間を孤独へと押し込める実存的な体験から、庇護性という新しい感情

へと至るための道」にほかならない、とボルノウは云う。

私たちは、現実に対するこの新しい関係を、いまのところ未規定な概念でもってさしあたり簡単に信頼（Vertrauen）と呼んでおこう。それによって私たちは、詳しい付言をもたない信頼そのもののことを云っているのである²¹⁾。

ボルノウによれば「信頼そのもの」とは、「あれやこれやの特定の存在に対する信頼や、誰それといった特定の人間に対する信頼」ではなく、「その背後に存していて特定の個別的な信頼を初めて可能にするような、世界や生一般に対する信頼」のことである。ここにおいて俄かに、実存主義克服の問題それ自体が、個別的なものと全体的なものとの関わりをその特徴としていることが明らかになる。しかもそれは、個別化された孤独から包括的な生の全体性への一方的な跳躍を指示するものではない。なぜなら、実存主義の克服とは、単に「実存的な不庇護性から新しい安全性へと移行行くことではない」からである。

……このような新しい庇護性は、実存的な脅威の諸経験を簡単に廃棄することは決してできないのであって、むしろそれらを共に含んでいなくてはならず、ただもっと高い地平においてそれらを切り抜けるのでなければならないのだ²²⁾。

いまや、ある種の驚きとともに、問題は個別的なものと全体的なものとのあいだの往還そのものであったことが明らかとなる。渦に巻き込まれて問うことそれ自体が、初めからその問いの中心を内包していたのである。私たちを巻き込んだ巨大な問いの渦は、私たちのうちにもまた大きな渦を巻き起こさずにはいない。渦の回転は確実に、私たちの身体に消えがたい余韻を刻み込んでいる。包括的な生の全体によって準備された問いを理解し、共に問うということがありうるとすれば、このときをおいてほかにはない。船酔いにも似たその感覚は、やはりある種の醗酵である。それゆえ、外側から渦を眺めるものは、本当のところそれは何事でもなかったのだと論じてやりたくなるだろう。なるほど、問いの渦に巻き込まれた者が、少なくともその後しばらくのあいだ、穏やかな海では満足に泳ぐことすらできないというのは、ありそうな話しである。

C. 啓示性 ― 存在と無の手前で

個別的なものと全体的なものとのあいだの往還は、個別的なものとしてのわたしの身体を通して初めて可能になる。内へ内へとまなざしを閉じてゆくことで、身体はゆっくりと確実に外へと向かって開かれてゆく。内と外をめぐって、世界と自己とが反転してゆく。個別と全体のあいだで、或る種の予感もたらされる。子どもと周囲の人間との信頼関係の重要性について、ボルノウは、ニチュケの証言を引いた上で次のように述べる。

あたかも、世界一般と生一般への信頼はすべて根本的に、庇護し守ってくれる特定の人物への信頼のなかで経験されなくてはならないものであるかのように思われる²³⁾。

個別の事例から、一般的な確信が予感として導きだされる。しかも、そこで主張されていることは、「個別の人物」への信頼を通して「普遍的な信頼」が獲得される、ということにほかならない。個別から全体へのこうした一般化・普遍化は、いずれの場合も、全体的なものとの個別なものとの相互に浸透しあうことにおいて可能になっている。それゆえ実はそこには、「個別から全体へ」とか「全体から個別へ」といった方向性は存在しない。

たしかに私たちはここで、軽々しく決断を下してはならない。しかしおそらく、この場所で、まったく慎重に——実証的な論拠としてではなく、一つの可能性の暗示として——次のような示唆を与えることは許されるだろう。すなわち私たちの時代において、特に詩作のなかで、こうした感謝に満ちた存在の庇護性という感情が現れてきている (abzuzeichnen beginnen: 輪郭をもち始めている) ということである²⁴⁾。

もちろん、個別の詩人の証言からすぐさま、問いの渦の核心は新しい希望と庇護性である、と云うことができるわけではない。その意味では、詩人の言葉は「たんに詩人の言葉としては、普遍的な拘束については何事も証明してはいない」と云える。

しかし、これらの詩人の言葉はおそらく、そこに庇護性の新しい諸経験が現れてきている (abzuzeichnen beginnen: 輪郭をもち始めている) ということの最初の予示的な示唆として、用いられてもよいだろう²⁵⁾。

詩人たちの証言について、それが「新しい庇護性」の予徴であるか否かということは、ここでは問題にならない。それらの証言を一つの予徴として理解し、そこに或る種の予感を感じ取ることが重要なのである。渦の中心は存在するのか、それともそれは無にすぎないのか、そんなことを尋ねても仕方がない。私たちにできることはただ、詩人たちの言葉を一つの予徴として捉えるときに、そこからどのような可能性が開かれてくるのかを見定めることである。存在と無との手前において、かつて存在したものの余韻のうちに、いまだ存在しないものの予徴を見て取ることが求められている。

ここにおいては、思考の進行におけるある種の飛躍的な性格を避けることはできない。すなわち、以下の考察においては、問題全体の解明に貢献しうような礎石を、比較的独立した個々の研究において、可能なかぎり具体的な個々の現象に即して準備することを、繰り返し試みるのでなければならないのである。

渦の中心をめぐるって問うことは、その中心について客観的な記述を行うことではない。問題をめぐる巨大な渦が、わたしのうちにおいても生まれてきつつあるなら、渦の中心に何かを見て取るということは、わたし自身が見られているということに等しい。それ自体で完結した合理的な説明は、むしろ問うことの運動を停止させてしまうものであり、渦の中心を無へと帰することになる。反対に、渦が速度を増すならば、その中心はますますその奥行きを深くしてゆくだろう。絶えざる問いの渦のなかにおいてのみ、或る種の予感の生まれる余地が残されている。奥行きあるいは奥ゆかしさとはつまり、絶えずいまここに現れているものを越えて、その先へと差し向けられてあることにほかならない。

4. 課題と展望 ― 存在への問いというスタイル

実存主義克服の問題をめぐる叙述において、ボルノウは、個別的なものと全体的なものとのあいだの往還のうちへと読者を導いてゆく。そこにおいて私たちは、自分でもままたらないまま、問題をめぐる渦のなかへと巻き込まれることになる。問いの渦の中心として開き示される人間の生の可能性を、論理的に説明しうる仕方で概念把握するのではなく、兆しや予徴といった契機においてそのつど「新たに」発見することが、課題として私たちに委ね渡されている。したがって、「新しい」庇護性とは、たんに「これまでにない」とか「まっさらの」ということを意味しているのではない。そうではなくて、この修飾語は、実存主義の克服という問題をめぐる問いを繰り返し生きることにおいて、そのつど新たに人間の生の可能性を問い直すことを私たちに求めているのである。

ここで重要なのは、まさしく人間自身の生以外のなにものでもない²⁶⁾。

このように、渦動性、受動性、啓示性という三つの契機は、「読者への問題の委ね渡し」という特徴的な或る一つの性格を、その基調としている。人間学的な考察法においては、「問題」は著者の独り語り (Monolog) によって提起され解決されるようなものではない。その語りはいつも、対話 (Dialog) へ向かって開かれているのである。それは、中心となる事柄をめぐる問うことへと読者を誘うものであるとともに、著者と読者の双方における応答可能性＝責任 (Verantwortung) を開き示すものであると云うことができる。

兆しや予徴といった契機において読者の応答可能性を喚起するこうした思索のスタイルは、序論部分にのみ特殊なものではないのか、と問われるかもしれない。しかしながら、『新しい庇護性』においては、このような特徴的な性格を備えた叙述が思索の全体を貫く基調となっているのである。本書においてボルノウは、絶望や不安を本質とする実存主義の人間観を一面的なものとして批判しながら、それに代わる希望に満ちた生の可能性を明らかにして見せている。けれどもそこにおいては、実存主義の克服という問題に直面した人間の在りようそれ自体について主題的に論じられることはない。なぜなら、その問題を生きるべく促されているのは、ほかでもない私たち自身だからである。希望や庇護性についての叙述を一つひと

つ辿り歩くことにおいて、読者はいつのまにか、そこから開かれる新たな生の可能性へと沈黙のうちに委ね渡されている。実存主義克服の問題を生きることにおいて私たちは、実存主義的な理想に生の根拠を求めることも許されず、かといってまだ新たな希望に至ることも叶わないまま、両方の可能性のあいだに宙吊りにされることになる。この「宙吊り」の可能性について、ボルノウは一度も主題的に言及していない。実存主義的な生の余韻と希望に満ちた生の予徴とのあいだで、実存主義の克服というこの可能性そのものが、予感としてわたしに呼びかけてくるのである。

ここにおいて、完結した概念規定を拒否する無気味なるものに関わる思索のスタイルについて、重要な示唆がもたらされる。肝心なのは、或る事柄についてではなく、或る事柄をめぐる理解し語ることである。『新しい庇護性』においてボルノウは、実存主義の克服を一つの「問題」として浮き彫りにすることで、それによって開かれる新たな生の可能性へと私たちに委ね渡した。実存主義の克服という問題をめぐる渦のなかで、この「問題」は「問題」としてある種の予感のうちにその輪郭を縁取られてゆく。このことは、実存主義の克服についての考察を展開することとは決定的に異なるものである。実存主義の克服という問題を生きる可能性をめぐる思索は、その可能性を可能性のままに読者へと開き示す。可能性としての可能性へと委ね渡されていることにおいてのみ、私たちはその可能性をそのつど「新たに」生き直すことができるのである²⁷⁾。

このように、人間の生の可能性を可能性として読者へと開き示し、その可能性へと読者を委ね渡すことこそ、ボルノウの思索に特徴的なスタイルであると考えることができる。だとすればしかし、その思索を理解しようとするわたし自身の思索のスタイルも、それに応じた変容を求められることになるだろう。人間の生という無気味なるものをめぐる人間学的な考察を可能にしているのは、「として」(als) という一つの契機である。「或るものが或るものである」という素朴な概念把握が物事の本質を一義的に規定しようとするものであるのに対して、「或るものとしての或るもの」という理解においては、むしろその理解のうちに収めることのできなかつた差異がそのつど輪郭の周縁に際立たされることになる。「生命の現実のうちに与えられたこの特殊な現象が、人間の本質全体のうちにおいて意味深い必然的な一部として理解できるためには、人間の本質全体はどのようなものでなければならないのか？」(傍点引用者) ボルノウがこのように問うとき、人間の生への問いはそのつど特徴的な未確定性へと開かれている。だからこそ、この「個々の現象の人間学的な解釈の原理」は、「開かれた問いの原理」との密接な関係のうちにおいてのみ、十分に把握されることができるのである。ここにおいて問われているのは、概念が事象に一致するか否か(或るものが或るものであるかどうか)などではなく、或る事象を或る概念によって(或るものを或るものとして)捉えることにおいて、人間の生における如何なる可能性が開示され、また如何なる可能性が閉塞されるかということにほかならない²⁸⁾。

体系的な規定を拒否する無気味なるものをめぐる思索において、「或るものが或るものである」という素朴な概念把握は、その事柄の無気味さを歪曲し覆い隠してしまいかねないも

のである。それゆえ、無気味なるものをめぐる思索のスタイルを明らかにしようとする本研究の試みにとって、「或るものとしての或るもの」という理解と語りを基調とする思索をその動的な性格において究明することが現下の課題となる。そのさい特に、「或るものが或るものである」ことの自明性を問い直そうとするハイデガーの存在論的な思索を紐解くことが、重要な示唆を与えてくれるだろう。存在への問いの地平においては、「世界としての世界」、あるいは「在るものとしての在るもの」が出会われるのだとハイデガーは云う。「或るものが或るものである」という前存在論的な自明性が失われた圧倒的な問いの地平において、「或るものとしての或るもの」という別な思索の可能性が開かれてくる。「或るものとしての或るもの」という理解と語りを基調として思索することは、存在への問いを生きることと、深い関わりをもっているのである。ボルノウが一貫して無視し続けてきたこの「存在への問い」の地平において、ボルノウ自身の思索がもつより奥深い可能性を解き放つための手がかりが得られることになるだろう。ハイデガーによる存在論的な思索に耳を傾けることを通して、無気味なるものをめぐる思索の可能性と限界とを開き示すことが、その事柄の無気味さによって促された本研究の次なる課題である。

◆凡例・註

本文中における引用については、そのつど註に引用箇所を表示する。外国語文献からの引用に際しては、すでに邦語訳のあるものはそれを参考に訳出した。ただし、訳語は可能なかぎり統一し、それに伴って訳文にも変更を加えた場合がある。引用文中、特に断りが無いかぎり、傍点は原文のイタリック部分を表示している。また、引用文中（丸括弧）については原典著者、〔亀甲括弧〕は引用者による挿入である。

1) こうした試みの代表的なものとして、以下の諸研究を挙げることができる。

河合隼雄『臨床教育学入門』岩波書店、1995年

和田修二ほか編『臨床教育学』アカデミア出版、1996年

小林剛ほか編『臨床教育学序説』柏書房、2002年

皇紀夫編『臨床教育学の生成』玉川大学出版部、2003年

臨床教育人間学会編『他者に臨む知』世織書房、2004年

2) 人間学的な考察法をめぐるボルノウの考察に関して、我が国では特に以下の研究が詳細な論述を行っている。本稿の執筆にあたっても随時参照し、多くの示唆を得た。

岡本英明『ボルノウの教育人間学』サイマル出版、1972年

高橋勝「O. F. ボルノウの教育人間学における方法論的特質——解釈学と実存の視点を中心に——」『東京教育大学大学院教育学研究集録』第13集、1974年

川森康喜『ボルノウ教育学の研究』ミネルヴァ書房、1991年

広岡義之『ボルノウ教育学研究 上・下』創言社、1998年

3) Bollnow, O. F.: *Anthropologische Pädagogik*, 2. Aufl. Tokio, 1972, c1971. (浜田正秀訳『人間学的に見た教育学』玉川大学出版部、改訂第二版1971年、初版1969年) S. 24ff.

4) 前掲書 S. 30ff.

- 5) 前掲書 S. 30ff.
 - 6) 前掲書 S. 34ff.
 - 7) 前掲書 S. 36ff.
 - 8) Bollnow, O. F.: *Das Wesen der Stimmungen*, 4.Aufl. Frankfurt am Main, 1968, c1956. (藤縄千艸訳『気分の本質』筑摩書房、1973年)、S. 15ff.
 - 9) Bräuer, G.: Überlegungen zum „Prinzip der offenen Frage“, in: Kümmel, F. (Hrsg.): *O. F. Bollnow: Hermeneutische Philosophie und Pädagogik*, Freiburg, 1997, S. 122f.
 - 10) Bollnow, O. F.: *Neue Geborgenheit. Das Problem einer Überwindung des Existentialismus*, Stuttgart, 1955. (須田秀幸訳『実存主義克服の問題——新しい庇護性——』未来社、1969年)
 - 11) 邦訳書においてはこの「実存主義克服の問題」がそのまま書名として用いられており、元来の書名である「新しい庇護性」のほうが副題とされている。この変更にあつわる事情については、同邦訳書の「日本語版への序文」および「訳者解題」を参照。
 - 12) Bollnow: *Neue Geborgenheit*, S. 11.
 - 13) 前掲書同頁
 - 14) 前掲書同頁
 - 15) 前掲書同頁
- ここでは、特に読者としての「わたし」と区別された著者を「私」と表記する。
- 16) 前掲書 S. 13.
 - 17) 前掲書 S. 14.
 - 18) 前掲書 S. 17.
 - 19) 実存主義についてのこうした理解については、もちろん異論もあるだろうが、残念ながら本稿ではそれを扱っている暇はない。実存哲学の立場からボルノウに対する応答を試みたものとしては、例えば Wehner, U.: *Pädagogik im Kontext von Existenzphilosophie*, Würzburg, 2002.、第二章を参照。
 - 20) Bollnow: *Neue Geborgenheit*, S. 18.
 - 21) 前掲書 S. 19.
 - 22) 前掲書 S. 18f. (vgl.ebd.S. 17.)
 - 23) 前掲書 S. 21.
 - 24) 前掲書 S. 26.
 - 25) 前掲書 S. 28.
 - 26) 前掲書 S. 14.
 - 27) このことは、理解することと生きることの相即的な関わりについて、「無気味なるもの」をめぐる思索という観点からいまい度問い直すことを要請するものである。その端緒としては、高橋勝の前掲論文(註2)が重要な示唆を与えている。
 - 28) 教育学研究の領域においてこの「として」という契機的方法的な重要性を強調した先駆的な研究として、例えば、皇紀夫「『臨床教育学』とは」(和田修二ほか編『臨床教育学』)、P. Standish・齊藤直子「平等に先立つ倫理——レヴィナス的道德教育の再構築に向けて」(『現代思想』第30巻4号、青土社、2002年)を挙げることができる。前者はボルノウの解釈学的な教育学をその基盤として、後者はハイデガーの現象学を発端として、それぞれ展開したものであり、双方とも本研究のテーマと密接な関わりの中にいる。これらの研究に触れつつその関わりを明らかにし、本研究との異同を究明する紙幅が残されていないのは遺憾であるが、いずれ稿を改めて詳しく論じたいと思う。